

| | |
|-------------|----------|
| 群 教 七 | G05 - 05 |
| | 平15.214集 |

創造的な鑑賞の能力を 高めるための指導の工夫

——音楽の特徴を体験的に感じ取る活動を取り入れて——

特別研修員 荒木 奈都子 (群馬県立沼田女子高等学校)

I 主題設定の理由

国際化、情報化が急速に進展する現代にあって、音が氾濫する社会の中で、音楽の価値観はますます多様になっている。その土地に生まれ根付いている伝統音楽からコンピュータを駆使してのデジタル音楽まで、音楽の種類も多様化しており、一人一人のもつ音楽の価値観も変化しつつある。このため、様々な音楽に対して柔軟な態度をもち、世界の諸民族の音楽を理解し尊重する態度を育成することは、国際理解の視点からも大切である。また音楽を愛好する心情を育てるためには基礎的な音楽活動の能力を身に付けるだけでなく、様々な感動体験を通して、一人一人のもつ音楽の価値観を広げることへの取組が重要になってくると考える。

入学時のアンケートによると、合唱のハーモニー体験や共感できる詩、躍動感のあるリズムなどを味わえる歌唱は多くの生徒が好み、知識理解や技術習得が必要となる器楽は、経験の多少によって得手不得手が分かれる傾向にある。鑑賞については、内容が偏っていたり、受動的な学習が多かったりしたためか、あまり好まない生徒が多い。

特に鑑賞は、生徒が生涯を通して行う音楽活動に占める割合が大きいことを考えると、音楽の価値観を広げるためにも、感受性豊かであるこの時期に鑑賞に対する適切な指導が必要である。そこで本研究では、より鑑賞に親しめる生徒が育つよう、創造的な鑑賞の能力を高めるための指導の工夫に取り組むことを考えた。創造的な鑑賞の能力とは、聞こえてくる音を単に流れる音として聞くのではなく、音楽の特徴を理解し、主体的・能動的に鑑賞する能力であり、その能力を高めるためには、体験を通して音楽の特徴を感じ取り、表現活動へとつなげていく必要があると考える。

そこで、創造的な鑑賞の能力を高めるための手だてとして、音楽の特徴を体験的に感じ取る活動を取り入れる。音階や演奏形態の分析、器楽・創作表現活動、他の音楽との比較など体験的に感じ取る活動を取り入れれば、音楽の特徴を理解することができ、主体的・能動的な鑑賞活動へとつながり、音楽に対する感じ方や考え方が深まるだろう。そして体験から得た知識や情操を生かして鑑賞することにより、受動的な鑑賞の学習では味わえない音楽の楽しさや幅広さを味わうことができるであろう。

以上のことから、創造的な鑑賞の能力を高めるための指導の重要性を考え、本主題を設定した。

II 研究のねらい

鑑賞の指導において、気付く、表現する、広げる過程に音楽の特徴を体験的に感じ取る活動を取り入れれば、主体的・能動的な鑑賞活動を引き出すとともに、音楽の特徴についての理解や音楽に対する感じ方や考え方が深まり、創造的な鑑賞の能力を高めることができることを、実践を通して明らかにする。

Ⅲ 研究の見通し

気付く、表現する、広げる過程に、音楽の特徴を体験的に感じ取る活動を取り入れれば、創造的な鑑賞の能力を高めることができるであろう。

- 1 気付く過程で、音階や演奏形態などの音楽の特徴を、分析しながら体験的に感じ取る活動を取り入れれば、その音楽に対する興味・関心が高まり、自分なりの観点をもって鑑賞できるようになるだろう。
- 2 表現する過程で、音楽の特徴を、器楽・創作表現を通して感じ取る活動を取り入れれば、その音楽の特徴を生かして表現することができ、分析し見つけた音楽の特徴についての理解を深めることができるだろう。
- 3 広げる過程で、感じ取った音楽の特徴と他の民族の音楽の特徴とを比較しながら、その音楽と音楽が根ざしている背景とのかかわりを感じ取る活動を取り入れれば、その音楽と文化や歴史を関連づけることができ、音楽に対する感じ方や考え方が深まるだろう。

Ⅳ 研究の内容と方法

1 研究の内容

(1) 「創造的な鑑賞の能力」とは

日常的な生徒の鑑賞活動の多くは音の感覚を覚える「聞く」であり、聞こえてくる音を注意して耳に留める「聴く」はまれである。創造的な鑑賞の能力とは、受動的な能力でなく音楽の特徴を理解し、主体的・能動的に鑑賞する能力ととらえる。主体的に鑑賞する能力とは音楽全体を漠然と聞くのではなく、音楽の特徴に興味・関心をもち、自分なりの観点をもって聴く能力であると考え。また能動的に鑑賞する能力とは、音楽の特徴についての理解を深め、器楽・創作などの表現活動につなげていく能力であると考え。さらに他の民族の音楽と比較しながら鑑賞する活動を取り入れることで、音楽と文化や歴史とを関連づけることができ、音楽に対する感じ方や考え方を深めていけると考える。これらの一連の働きをもった鑑賞活動の能力を創造的な鑑賞の能力ととらえる。

そこで聞くという受動的になりがちな鑑賞活動に、表現・創作分野を関連づけながら体験を通して感じ取る活動を取り入れることが、創造的な鑑賞の能力を高めることに有効であると考え。創造的な鑑賞の能力を高めることで、音楽の特徴やよさ、美しさに気付いたり、音楽を分析的に理解したりできるようになり、ただ聞く音楽から味わって聴く音楽へ深まっていくと思われる。

(2) 「音楽の特徴を体験的に感じ取る活動」について

人間は音楽を聴いて感じ取ったものをイメージとしてとらえ、それを発信源として表現・創作・鑑賞などの音楽活動に発展させていく。ゆえに感じ取る活動は音楽の基本であると考え。音楽の特徴には、音楽を構成しているリズム・速度・音階・演奏形態、演奏される楽器の構造や音色などがあげられる。本研究ではその他に、音楽が根ざしている背景としての風土・宗教・生活習慣などの文化や歴史も特徴に含めて考えていく。

主体的・能動的な鑑賞活動を引き出すために器楽・創作分野と関連させ、題材には民族音楽を取り上げ、体験的に感じ取る活動を次の方法で取り入れる。

ア 民族音楽に対する興味・関心を高め、自分なりの観点をもって鑑賞できるようにするた

めに、演奏場面の他に楽器の製造工程や調律の様子を映像で鑑賞する。またグループ学習にて、音階や演奏形態などの特徴を分析し、見つけた特徴を工夫して楽譜化する。

イ 民族音楽の特徴についての理解を深めるために、器楽・創作表現活動を通して感じ取った特徴を追求できるようにする。具体的には特徴を考慮した代替楽器の選択を行い、民族音楽の一形式を合奏にて疑似表現する。その際音楽の特徴を生かした創作表現も工夫する。

ウ 音楽に対する感じ方や考え方を深めるために二つの民族音楽を比較しながら聴き、それぞれの共通点から音楽と文化や歴史を関連づけられるようにする。具体的にはインドネシア地域を中心に発達した伝統音楽のガムランと、我が国の音楽を音階および演奏形態で比較する。音階については1オクターブをある規則性をもって5音に分けたペロツ音階と、ほぼ同じ配列の琉球音階とを比較する。また演奏形態についてはガムランの一形式である「ギラッ」と、演奏形態が似ている雅楽の「越天楽」とを比較する。

2 研究の方法

(1) 授業実践計画

| | | | | |
|------|----------------------|--|------|----------------------|
| 対象 | 沼田女子高等学校 1年1組 40名 | | 実施期間 | 10月～11月 全9時間 |
| 題材 | 民族音楽の特徴を感じ取りながら鑑賞しよう | | 教材 | 「ギラッ」ガムラン/インドネシア・バリ島 |
| 抽出生徒 | A子 | 授業全般に意欲的に取り組む。読譜能力や器楽演奏技術は高く、特に歌唱では表現力豊かである。鑑賞は活動が少ないとの理由でありあまり好まない。総合的な音楽の能力を高める支援をしたい。 | | |
| | B子 | 自分の好きな音楽はよく聴くが、実技を伴う分野に関しては苦手意識が強い。音楽について様々な方向から動機付けすることによって、興味・関心を高め、活動に対する意欲を引き出したい。 | | |

(2) 検証計画

| 項目 | 検証の観点 | 検証の方法 |
|------|---|-----------------------------------|
| 見通し1 | 気付く過程で、音階や演奏形態などの民族音楽の特徴について、分析しながら見つけたし工夫して楽譜化するという体験的に感じ取る活動を取り入れたことは、その音楽に対する興味・関心を高め、自分なりの観点をもって鑑賞することに有効であったか。 | ・ワークシート記入内容 ・行動観察 ・グループ発表内容 |
| 見通し2 | 音色・音階の特徴を生かした代替楽器を選択して演奏する器楽表現や、リズム・演奏形態の特徴を生かした創作表現を通して、分析し見つけた音楽の特徴を体験的に感じ取る活動を取り入れたことは、音楽の特徴についての理解を深めることに有効であったか。 | ・ワークシート記入内容 ・演奏観察 ・グループ発表内容 |
| 見通し3 | 感じ取った民族音楽の特徴と我が国の音楽の特徴とを比較しながら、音楽が根ざしている背景とのかかわりを感じ取る活動を取り入れたことは、その音楽と文化や歴史を関連づけることができるようになり、音楽に対する感じ方や考え方を深めることに有効であったか。 | ・ワークシート記入内容 ・行動観察 |

V 研究の展開

1 題材および題材の考察

| | | | |
|--|-----------------------|----|----------------------|
| 題材 | 民族音楽の特徴を感じ取りながら、鑑賞しよう | 教材 | 「ギラッ」ガムラン/インドネシア・バリ島 |
| <p><考察></p> <p>民族音楽は楽器の構造、音階、リズム、演奏形態等の特徴がわかりやすく、既習の西洋音楽との相違点が多いので、生徒にとっては全く新しい音楽として鑑賞の観点を設定しやすい。また民族音楽は根本的に体感する音楽である点で、音楽の特徴を体験的に感じ取りながら鑑賞する題材として適していると考えられる。</p> | | | |

<教材について>

本研究で取り上げるガムランは、インドネシア地域を中心に発達した伝統的な合奏音楽であり、『青銅と竹の交響楽』と表される。「ギラッ」はガムランの基本的な形式を学習するための練習曲にあたる。この曲は、ある規則性をもって1オクターブを五つの音に分けた「ペロツ音階」が使われており、ほぼ同じ配列の音階に琉球音階がある。教材として取り上げるこの曲は、旋律の変化が少なくリズムの重なり合いで構成されているため、演奏形態や表現の工夫・創作がしやすく、主体的に取り組みやすいと考える。構成パートが多く難易度による選択ができ、個々の生徒の技能に対応できる。演奏形態においては我が国の雅楽との共通点が多く、比較しやすい教材であると考え。 ※ 詳細は別添資料参照

2 目標および評価規準

| | | | | |
|--------------|---|--|--|--|
| 目標 | <ul style="list-style-type: none"> 民族音楽の特徴を体験的に感じ取り、それを生かして表現する。 民族音楽の様々な特徴に着目したり、音楽が根ざしている背景とのかかわりを見いだしたりしながら鑑賞する。 | | | |
| 観点 | ア 関心・意欲・態度 | イ 芸術的な感受・表現の工夫 | ウ 創造的な表現の技能 | エ 鑑賞の能力 |
| 題材の評価規準 | ○民族音楽の特徴に関心をもち、意欲的に聴き、表現しようとしている。 | ○民族音楽の様々な特徴や、表現上の効果を感じ取っている。 ○感じ取った特徴を生かして、創作表現を工夫している。 | ○楽器の音色や奏法を生かして器楽表現をする技能（読譜力を含む）を身に付けている。 | ○民族音楽の楽器の構造や奏法、音色などの特徴を理解し、楽曲全体を聴き取っている。 ○音楽をその背景とかわらせず、総合的に理解し、聴き取っている。 |
| 学習活動における評価規準 | ①ガムラン楽器の構造や奏法の特徴、ペロツ音階の特性と表現上の効果に関心をもっている。 ②器楽表現やグループ活動へ、意欲的に取り組もうとしている。 | ①ガムランのリズムや演奏形態、表現上の効果を感じ取っている。 ②楽器の特徴や奏法の違い、ペロツ音階固有の表現方法を感じ取っている。 ③楽曲の構成や演奏形態を感じ取って、創作表現を工夫している。 | ①楽器の音色や奏法を生かして器楽表現する技能を身に付けている。 | ①自然や風土、文化や歴史など音楽が根ざしている背景を知覚し、楽曲全体を聴き取っている。 ②ガムランの楽器の音色や演奏形態などを理解し、楽曲全体を聴き取っている。 ③ガムランと我が国の音楽とのかかわりを理解し、共通点を見いだしながら楽曲全体を聴き取っている。 |

3 指導計画（全9時間） ※ 詳細は別添資料参照

| 過程 | 時間 | 学習活動（形態：一斉【斉】・グループ【グ】） | 評価の観点と評価方法（○）・十分に満足できると判断できる状況（◎） |
|-------------|----|--|--|
| 気 付 く | 1 | <ul style="list-style-type: none"> LDにて、ガムランと同じ地域の音楽であるケチャを鑑賞し、風土・宗教・生活習慣などの文化や歴史と音楽とのかかわりを考える。【斉】 ケチャの演奏パターンを分析する。【斉】 LDにて「ギラッ」を鑑賞する。【斉】 ワークシートを活用し、ガムランの概要について学習する。【斉】 | <ul style="list-style-type: none"> 【エ①】 ○バリ島の風土・宗教・生活習慣などの文化や歴史的背景を知覚しながら楽曲全体を聴いている。（発言・ワークシート・行動観察） ◎音楽の特徴とのかかわりを意識している。【イ①】 ○リズムや演奏形態の特徴を感じ取っている。（ワークシート・発表内容） ◎表現上の効果を感じ取っている。 |
| | 2 | <ul style="list-style-type: none"> 「ギラッ」のパート別演奏を鑑賞した後、キーボードの音を頼りにペロツ音階を見つけだす。【グ】 工夫して楽譜化する。【グ】 独自の楽譜をグループごとに発表する。【斉】 ペロツ音階について学習する。【斉】 | <ul style="list-style-type: none"> 【ア①】 ○ガムランの音色や奏法の特徴に関心をもっている。（行動観察） ◎表現上の効果に関心をもっている。 |
| | 3 | <ul style="list-style-type: none"> 「ギラッ」を鑑賞し、リズムや演奏形態について一定の法則を見つけだし、ワークシートに記入する。【グ】 | <ul style="list-style-type: none"> 【イ①】 ○リズムや演奏形態の特徴を感じ取っている。（ワークシート・発表内容） ◎表現上の効果を感じ取っている。 |
| | | <ul style="list-style-type: none"> つがいのリズムパターンの練習をする。【グ】 | |

| | | | |
|------------------|-------------|--|---|
| 表 現 す る | 4 | ・「ギラッ」を鑑賞し、特徴を生かした代替楽器を次の三つの観点からグループごとに選択する。【グ】 ①本来の楽器に近い音色 ②本来の楽器に近い音階 ③グループ独自の音色 | 【イ②】 ○音色や音階の特徴を感じ取っている。 (評価シート楽器選択理由) ◎特徴を生かして奏法を工夫している。 |
| | 5 6 | ・グループごとにパートを決め、練習を行う。【グ】 | 【ア②】 ○意欲的に練習に取り組もうとしている。 (行動観察・評価シート) ◎自分なりの目標をもって取り組んでいる。 |
| 広 げ る | 見通し2 | | |
| | 7 8 | ・リズムや演奏形態などの特徴を生かし、創作表現を工夫する。【グ】 ・グループ創作による「ギラッ」を発表する。【ウ①】 ・他のグループの発表について、ガムラン合奏として工夫している点を挙げ、講評を書く。【エ②】 | 【イ③】 ○感じ取ったリズム・演奏形態の特徴を、創作表現に生かしている。(発表内容) ◎創作表現を工夫している。 【ウ①】 ○リズムや奏法を工夫して表現している。(発表内容) ◎グループ全体の調和を意識して演奏表現している。 【エ②】 ○演奏形態の特徴を聴き取っている。(ノート) ◎感じ取った音楽の特徴を照らし合わせながら講評を書いている。 |
| 広 げ る | 見通し3 | | |
| | 9 | ・ペロツ音階と琉球音階を比較して共通点を見つけだす。【斉】 ・雅楽「越天楽」を鑑賞し、ガムランとの共通点を見つけだす。【斉】 ・感じ取った音楽の特徴を楽曲に照らし合わせながら「ギラッ」を鑑賞する。【斉】 ・音楽と文化や歴史とのかかわりについて理解を深める。【斉】 | 【エ③】 ○ペロツ音階と琉球音階、ガムランと雅楽との共通点を見出している。(ワークシート) ◎共通点から音楽と文化や歴史とのかかわりについて、自分なりの考え方をまとめている。 |

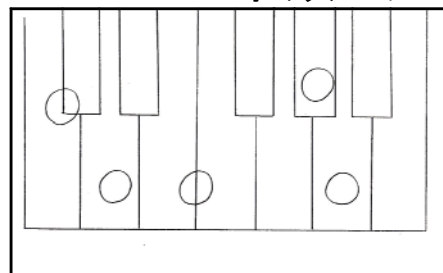
VI 研究の結果と考察

1 気付く過程で、音階や演奏形態などの民族音楽の特徴について、分析しながら見つけだし工夫して楽譜化するという体験的に感じ取る活動を取り入れたことは、その音楽に対する興味・関心を高め、自分なりの観点をもって鑑賞することに有効であったか

学習前の鑑賞に関するアンケートでは、活動が少ない、興味がわからない、聴き方がわからないなどの理由で約9割の生徒が前向きな印象をもたなかった。初めてガムランを鑑賞した多くの生徒は違和感もち戸惑っていたようであったが、分析しながら聴いていく中で、音楽固有の表現方法に関心をもち、自ら観点を見つけ、それを意識しながら鑑賞する姿勢が見られた。ガムランのペロツ音階は、ある規則性をもって1オクターブを5音に分けた音階であり、平均律（ドレミファソラシドで表すことのできる音階にはあてはまらない。また音程を決定する

資料1 ペロツ音階の分析

A子のグループ



絶対的な基準はなく、本来は五線譜にも表記できない。その音階の分析をA子のグループは資料1のように工夫し楽譜化した。ミとファの中間のように聴こえた音を五線譜に記せないと判断したA子のグループは、紙上に鍵盤を描き二つの鍵盤の境目にその音を記した。気付いた点として「五線譜というのは、人間が生み出した規準にすぎないから、きっとガムランの音階には昔から伝わってきた音があって、自然界に存在する音なので、五線譜には表せないんだと

思う。だけどそれが逆に心地よい。」と挙げていた。記述内容からA子の関心は音楽の伝承方法や記譜の有用性などの文化や歴史的背景にまで及んでいる。これは楽譜化する活動を通して視覚からもその特徴を感じ取り、音楽固有の表現方法を理解できた結果であると考えられる。

B子のグループは資料2のように、あいまいな音程や青銅の豊かな音の響きを何とか五線譜に表現しようと工夫していた。B子は特に音色に関心を示し、楽器製造工程の映像を通して「職人が経験などを頼りにして作っているし、それぞれの職人によっても音の感じ方が違うので音が統一されないのかと思う。」と記述しており、特徴的な音階とその背景にある伝承方法とを結びつけながら鑑賞している様子がうかがわれる。

また演奏形態を分析しながら聴く場面では、グループ内で担当楽器を決める際、B子は拍節周期を示す重要なパートを自分で選択した。自分の担当のパートを聴き逃さないよう真剣な表情で何度も繰り返し聴き、感じ取ったリズムを友人と話し合いながら資料3のように拍数と楽器のリズムを対応させた図表に表した。そして「ただ聞くだけではなく、実際に分析してみて、鑑賞するときの聴くポイントがなんとなく変わった気がした。」と感想を書いている。

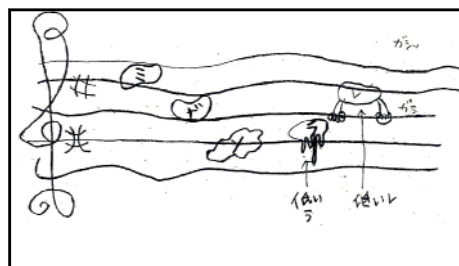
以上の様子から、鑑賞活動に音階や演奏形態など音楽の特徴を分析しながら見つけだし、それらを工夫して楽譜化するという体験的に感じ取る活動を取り入れたことは、音楽にはそれぞれ固有の表現方法や伝承方法があることへの気づきを促し、音楽に対する興味・関心を高め、自分なりの観点をもって鑑賞する活動を引き出すことができたと考えられる。

2 音色・音階の特徴を生かした代替楽器を選択して演奏する器楽表現や、リズム・演奏形態の特徴を生かした創作表現を通して、分析し見つけた音楽の特徴を体験的に感じ取る活動を取り入れたことは、音楽の特徴についての理解を深めることに有効であったか

器楽・創作活動との関連では特にB子に変化がみられた。今まで表現活動には消極的であったB子がグループの話合いの場面や練習に協力的になった(資料4)。カウントと拍節周期を示す重要なパートを自分から希望し、合奏全体をまとめる意識をもって練習に取り組みはじめた。自己評価表にも「みんながズレないように正確にカウントできるよう頑張りたい」と目標を書いている。また音色の特徴を生かすために、本来の楽器に近い音を友人と一緒にキーボードで見つけだす工夫もみられた。発表会において他のグループに対して書いた講評では、自分

と同じパートの音色やリズムに関して「LDの演奏みたいに本当のガムランに近い音を工夫していたと思う。」「カウントパートを中心に速さをしっかり変化させていたと思う。」とコメントしていた。この講評や感想から、自分で見つけたキーボードの音と比較したり、合奏

資料2 ペロツ音階の分析
B子のグループ



資料3 ギラツの演奏形態の分析
B子のグループ

| | ① | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 |
|------|---|---|---|---|---|---|---|---|
| ガムラン | ∞ | | ∞ | ∞ | ∞ | ∞ | ∞ | ∞ |
| ガムラン | ○ | | | | ○ | | | |
| ガムラン | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| ガムラン | ○ | | ○ | | | | ○ | |
| ガムラン | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| ガムラン | | | | ○ | | | | |
| ガムラン | ○ | | | | | | | |
| ガムラン | | | | | | ○ | | ○ |

資料4 話し合い・練習の様子



全体のバランスを考えたりしながら他者の演奏を聴いている様子うかがわれる。これは音楽の中に占める各楽器や演奏者の役割について、演奏体験を通して感じ取ることができたからであり、音楽の特徴に対しての理解が深まった結果と考えられる。

また装飾リズムを奏でるパートを担当したA子は楽器選択の際何度もLDの演奏を聴き、最終的に「西洋音楽にはないあいまいな音を創り出すことができるから」との理由でインドネシアの楽器アングルンを選択した。これは、微妙な音程差のある2本の竹を振動させ音を鳴らす楽器である（資料5）。

他のメンバーへの働きかけとしては、ペロツ音階に近い音程を創り出すために箏を勧め、古代のガムランアングルンといわれる竹製楽器のみを使用したオーケストラに近い音色を創り出した。箏は弦を張る柱（じ）の位置を左右に動かすことで、平均律にはない微妙な音程を創ることができるため、ガムラン特有の音程に着目した合奏を創り出そうという意図がうかがわれる。創作表現では、提示された基本パターンを応用しながら速度・強弱において独自の創作を試み、演奏形態にも変化をもたせた。指揮者を置かない、本来決められた楽譜はない、一定の周期で繰り返される、強弱・テンポは演奏者自身が全体のバランスを聴きながら判断するなどのガムランの特徴をできるだけ組み込む工夫が見られた。

また、特徴を最大限に生かすために、大人数での合奏に挑戦したグループもあった。代替楽器ではあったが、それぞれの音色や奏法を工夫することで、『青銅と竹の交響楽』と表される本来のガムランに近い響きを味わいながら演奏することができた。これらの表現の様子から、鑑賞活動に、その音楽の特徴を生かして器楽・創作表現する活動を体験として取り入れたことは、分析によって感じ取った音楽の特徴についての理解をさらに深めることに有効であったと考える。

3 感じ取った音階や演奏形態など、民族音楽の特徴と我が国の音楽の特徴とを比較しながら、音楽の根ざしている背景とのかかわりを感じ取る活動を取り入れたことは、その音楽と文化や歴史を関連づけることができるようになり、音楽に対する感じ方や考え方を深めることに有効であったか

発表会后、まとめとして音楽と文化や歴史を関連づける学習を行った。聞き覚えのある音楽で共通点を比較しやすいよう、琉球音楽と雅楽を取り上げた。ペロツ音階分析の中でA子は「沖縄の音楽みたい」と感想を述べていたが、琉球音楽も5音に分けた音階を使用し、ペロツ音階に非常に近い。また雅楽の「越天楽」は中学校での既習教材であり、指揮者を置かない、詳細な楽譜はない、一定の周期で繰り返される、拍のとり方やテンポは演奏者全員の呼吸を合わせて演奏するなどガムランと似ている点が多い。両者を比較しながら、それぞれの音楽と文化や歴史など音楽が根ざしている背景とのかかわりを学習し、それらを照らし合わせながら、改めて鑑賞を行った。

A子は風土や歴史と音色とのかかわりを考える項目に対し「その土地に合った素材を生かした楽器が生まれ、自然のままの音を取り入れた。島国なので独特のうなりやズレを出したのは『自分たちだけの音楽』を創りたかったからではないか。」「自然のままを好むので、音も拍子もわざわざそろえずにズレているのだと思う。ヨーロッパより多面的。世界に一つしかない音を創り出している。」と記述している。楽譜化によって感じ取った特徴が意見に反映されており、総合的に音楽をとらえていることがわかる。また音楽と文化とのかかわりでは「時間の

資料5 発表会の様子

左側がアングルンの演奏



流れがゆっくりなように人々もせかせかしていない土地では、楽器の音も柔らかく濁ったようにいつまでも響き続ける。」「音楽を通して、異文化やその国の歴史に少し触れた気がして、不思議な気持ちになった。その国の文化や歴史が背景になって音楽が創り上げられているのだと改めて感じた。」と、音楽の生まれた必然性を探求するような感想も書かれている。

B子は越天楽を聴く際、ギラッでの鑑賞の観点をあてはめながら自分なりに聴くことができ、一段階上の鑑賞へとつながった。また風土や歴史と音色とのかかわりを考える項目では「その土地に合っていると思った。ガムランは湿気が多いので、影響を受けにくい青銅製の楽器になった。」「結束力が強いから指揮者がいないのかと思った。自由な感じ。楽譜がなくても、音楽は人によって受けつがれていく。」と書き、伝承方法や音楽が根ざしている背景などを感じ取り、音楽と結びつけて鑑賞している様子がかがわれた。

今回の抽出生徒に限らず、個々の生徒たちの鑑賞活動に関する既存の能力はそれぞれ異なるが、音楽に対する感じ方や考え方の記述内容は、学習前とまとめの学習とでは明らかに変化した。学習を通しての感想には、多くの生徒が音楽と文化や歴史とのかかわりに触れ「前よりもじっくり聴けるようになった。音楽の捉え方が変わった」など約8割の生徒が前向きな印象を書いた。このことから、文化や歴史を関連させ比較しながら感じ取った音楽の特徴を手がかりに、音楽についての感じ方や考え方を深めることができたといえよう。

Ⅶ 研究のまとめと今後の課題

- 音楽の特徴を体験的に感じ取る活動を通して、段階を追うごとに主体的に鑑賞する場面が多く見られるようになり、まとめの学習では自分の感じ取った特徴に焦点をあてて鑑賞する姿勢が全体の大半を占めた。鑑賞と表現・創作分野を関連させ、その中に感じ取る活動を取り入れたことは、生徒の鑑賞へのイメージ変革につながる一歩となり、主体的に感じ取り、表現するという能動的な鑑賞活動に広がったのではないかと考える。知的好奇心の高まるこの時期に、創造的な鑑賞の能力を高める指導の重要性を改めて感じた。
- 創造的な鑑賞の能力を高めるための指導を工夫したことは、異文化に対する理解という視点でも成果があがったといえる。初めはガムランに違和感をもち戸惑っていた生徒たちが、学習が進むに連れ、逆に代替楽器での演奏の音色に「何かが違う」と感想を述べた。これは民族音楽がその地域の文化や歴史と深くかかわって存在していること、また比類のない音楽であることを、その価値とともに認識することができたためであろう。一人一人のもつ音楽の価値観を広げるためにも、創造的な鑑賞の能力を高める指導の工夫を重ねていきたい。
- 本研究は創造的な鑑賞の能力を高めるための指導の一端に過ぎない。今回は生徒が初めて耳にする教材であったため、興味・関心を引き出しやすかったものとする。今後も広い視野での鑑賞教材に取り組み、歌唱・器楽・創作分野との関連を図りながら、鑑賞の授業を展開していきたい。

<参考文献>

- ・皆川 厚一 著『ガムランを楽しもう～音の宝島バリの音楽』 音楽之友社(1998)
- ・山口 修 監修『必携・新しい”世界の音楽”学習への手引き「アジアの音楽と文化」』(レーザーディスク解説書) ビクターエンタテインメント(1998)